

幼稚園における「河童を用いた想像遊び」の実践報告

A Practice Report of "Imaginative Play Introducing Kappa" in a Kindergarten

新美秀和・鎌田千花・土井美里・中西一輝・西堀咲輝

Niimi Hidekazu, Kamada Chika, Doi Misato, Nakanishi Kazuki, Nishibori Saki

西山淳・久武貴昌・松浦健吾・山川綾音

Nishiyama Jun, Hisatake Takamasa, Matsuura Kengo, Yamakawa Ayane

要 約

本稿では、大学のゼミ活動の一環として実践した「河童を用いた想像遊び」について報告した。活動の具体的内容は、ある学童保育で実践している活動（NPO 法人芹川子育て支援部門、2013）を参考にして原案を作成し、活動の場となった幼稚園の園長先生及びクラス担任との協議を経て決定した。協議の結果、5回の活動時間が与えられることとなった。1回あたりの活動時間は30分～1時間、頻度は週に1回であった。第1回は彦根にいとされる妖怪を紹介し、第2回と第3回では河童の絵本を読み、第4回目には河童への絵手紙を園児たちに作成させ、第5回目には河童からの返事を手渡した。5回の活動が終了した後、保護者に対し自由記述のアンケートにとったところ、園児たちはすっかり河童の存在を信じ込んだこと、また休日などに親子で河童を探しに近所を散策したことなどが報告された。最後に、今回の活動が園児に及ぼした影響、保護者に及ぼした影響および、本稿執筆者たちに及ぼした影響について論じた。

Key Words : 想像遊び, 河童, たましい, コスモロジー, 心理臨床学

1. 問題意識と方法

1.1. 問題意識

本稿は、筆者らの一人（新美）が担当する専門演習A・Bにて取り組んだ活動を報告するものである。専門演習A・Bとは3回生を主たる対象としたいわゆるゼミであり、各教員が自らの専門性に基づいた学びの場を用意して学生たちに力をつけさせるという授業である。2013年度の新美ゼミのテーマは「たましい」であり、しかもそれを念頭に置いた実践的活動をするということであった。実践的活動というのはActive Learningをゼミに取り入れたかったからであるが、またどのようなものと捉えているかについては少し説明が必要であろう。

新美は臨床心理士であり、専門は心理臨床学である。これまで主として、言葉以前の感覚として感受されるものをどのように言語にしていけばよいか、特に言語化の際に注意すべき点について考えてきた。たとえば我々がバウムテストを臨床現場で用いると、相談者が描いた絵については、たとえその人との面接が終了して何年も経っていたとしても、どういっわけか粗雑に扱うことができない。描いてもらった絵は描いた人のところを映し出すための単なるモノではなく、そ

れ以上の「何か」を帯びたモノのように感じられる。医師にとってのレントゲン写真は所見作成のための道具にすぎず、それゆえ法の指定する保管期限が来れば所定の方法で廃棄することができるだろうし、そこに何の未練もないだろう。ところが心理士にとっての絵はそうではないのである。

新美は、相談者が描いてくれた絵が帯びているこの「何か」への感性こそが心理臨床家の専門性の根幹であると考えている。そしてその「何か」への感性とは、「何か」がその絵に単に宿っているということを感じることができるかどうかだけを意味しない。それだけでは絵を粗雑に扱えない理由にはならないからである。我々が絵を粗雑に扱えないのは、その「何か」に対して微かな畏敬の感覚をも感じるが故であろう。このようにみていくと、絵に対する我々のこの感性はアニミズム的な感性であることがよく分かる。箸には使った人のたましいが分有されるがゆえに、割りばしは使用後は折ってから捨てることによってたましいをもとに戻すという習俗があるが、それと同じく、絵にも描いた人の「たましい」ないしその一部が分有されているように心理臨床家には感じられているようなのである。

ところで、「たましい」のように合理的な認識にとっては把握不可能なものに対する感性が近代に入って徐々に弱くなっていったのは、たとえば鎮守の森の扱いをみても明らかであろう。高度経済成長の時代に、霊的にムラを守ってきた数多くの森がそれぞれ合理的な理由によって潰されて、縮小されていった。そこで破壊されたのは森であり、そして同時に合理的な認識作法によっては把握されない「何か」を畏れ敬う認識作法であったといえるだろう。

この破壊は、現代の人間に対しきわめて大きな影響を有していたように新美には感じられている。というのも、他者の人格や生命を尊重するというとき、尊重の根拠はこのたましいへの畏敬の感覚にしかないように新美には思われるからである。しかし同時に、破壊は決定的なものではまだないとも考えている。というのは、失われたこの感性へのノスタルジーに満ちた作品、たとえばスタジオジブリの作品群が多くの人々の共感を呼んでいるからである。霊的な「何か」を感じ畏れる感性は、深く埋もれてはいるけれどもまだ根絶やしになってはいないのではないだろうか。

このような考えの下、たましいに関わる活動をさせ、それを通して体験的に心理臨床の根幹を学ばせたかったというのが上記ゼミテーマの設定理由である。

1.2. 活動枠組みの策定

前項のような問題意識をある程度新美ゼミ内で共有したのが2013年4月である。その後、どのような活動ができるのかをゼミ生たちと議論するなかで、松浦（本稿執筆者の一人）が「妖怪を取り入れた想像遊び」を提案した。松浦は夏季休暇期間に、アルバイトとしてある学童保育にて働いていた。その学童保育では夏季のイベントの中核にこの想像遊びを置いているのだが、それを自分たちのゼミでもできないかと考えたのである。

そこで、まずはこの学童保育を受託運営しているNPO法人芹川の川崎敦子氏を訪ね、どのような活動をされているのか聞かせていただいた。川崎氏によると、芹川の想像遊びは絵本「でた！

かっぱおやじ」(安曇ら, 2003)や「でた!かっぱおやじの舞台裏」(安曇・伊野, 2003)を参考にして作り上げたということであった。ただし川崎氏によると, 安曇らの活動では幽霊と妖怪の区別がつけられておらず, また妖怪が実在と不在との境界線におかれるのではなく限りなく実在の領域におかれている点が問題であると感じたということであった。そこで芹川が運営する学童保育では, 幽霊の要素は排するとともに, 妖怪を一度も目撃できないように工夫したという。

芹川の学童保育で具体的にどのような活動が展開されていたかについては「彦根妖怪図鑑」(NPO 法人芹川子育て支援部門, 2013)に報告されているが, 以下に少しだけ紹介しておきたい。夏休みの始まるころ, ある妖怪の痕跡がいくつも学童保育の建物近辺で見つかる。やがてその妖怪からの手紙が来たり, その妖怪の出没しそうなところにみなで探検に出かけたりするなどして, その妖怪の「気配」を感じながらの交流が積み重ねられていく。夏の終わりには学童保育の近辺にいた妖怪から手紙が来る。これから寒くなってくるので自分は本拠地に戻る, しかし夏の交流を通じて学童の子どもたちには好意を持ったから, これからも本拠地から見守っていくという趣旨の, 別れの手紙である。芹川の想像遊びの概要は以上である。なお, 芹川ではいくつか学童保育を運営しているが, 用いる妖怪はそれぞれの学童保育の近くに伝承として伝わるものが選んでおられた。

この芹川方式の「妖怪を取り入れた想像遊び」は「目に見えないもの」と付きあう作法を含んでいる上に, 遊びとしてもたいへん魅力的であるように思われた。そこで新美ゼミの活動としてはこれを実践することを基本とした。幽霊については芹川と同様, 登場させないほうがよいだろうと我々も直感的に判断した。ただしその理由については, 活動開始前の時点では言語化することができなかった。

1.3. 活動プログラムの作成プロセス

当初決めていたのは, じつはこの程度までである。詳細はゼミでの活動をさせていただける場所とも相談しながら決めていきたいと考えていた。本学から最も近い稲枝東幼稚園にて活動をさせていただくに至ったのは偶然によるところが大きい。

本学炭谷将史准教授は, 近年, 本学と地域との連携を深めようと様々な取り組みをしている。2012年度末に彼が, 稲枝東幼稚園はかなり研究熱心な幼稚園であり, 自分たちの教育を振り返る論文集を毎年刊行しているらしいという情報を地域の方から入手した。そこで, この進取の気風のある稲枝東幼稚園でならなにか新しい実践活動をさせていただけるのではないかと考え, その許可を得るべく新美とともに2013年5月に訪問した。対応してくださったのは園長先生と年長クラス担任教師であった。この活動の狙いが, 幼児に対して何かを提供する経験の中で学生に学ばせることであると伝えたところ, 具体的な活動内容を聞いたうえで判断したいという返答が園長より得られた。そこで新美は自分のゼミにて活動案をなるべく詳しく作成してから幼稚園を訪問し, 園長および教師から疑問点や問題点の指摘を受けて修正を施すということを幾度か繰り返した。活動すること自体がおおむね了承されたのは2013年9月であった。ただし活動を年間

スケジュールの中に落とし込む関係上、それほど長い時間や多い回数を提供できないと告げられた。我々のゼミに与えられたのは毎週月曜朝9時からの30分程度、普段ならば朝の体操をするまでの時間帯であった。回数は4回であり、それ以降の活動に関しては4回目の活動を見てから判断しようということとなった。下表1は、承認された4回分の活動の概要である。

表1. 活動の流れについての当初案

回	概 要
# 1	彦根における妖怪の紹介と河童イメージの導入
# 2	少しかわいい河童の絵本を読み聞かせる
# 3	少し怖い河童の絵本を読み聞かせる
# 4	河童に対して芽生えてきた怖さを封じるためのお守りの作成

なお我々の活動に河童を取り入れた理由は、稲枝東幼稚園近辺には河童しか伝承されていないためである。またもし5回目以降の活動が許可された場合には、河童からの手紙が来る、河童を探しに園の外に出かける、などの活動を予定していた。

活動は2013年11月上旬から開始することとなった。また、園児の前に立つ学生が多いと園児が集中しにくいということで、訪問学生は2人を基本とすることとなった。

ところが、実際には上記の流れは途中で変更された。第3回目の活動の後に新美が園を訪れ、今後についての打ちあわせをした際に、園長先生およびクラス担任教師が変更を求めたためである。理由は、第3回目の活動の結果、想定していた以上に幼児たちの一部が河童を怖がったのだがそれをお守りで鎮めることができるかがわからないこと、また仮にお守りにより不安を鎮めることができた場合には、後々お守りを紛失してしまったときにかえって大きな不安を呼び起こすことになるのではないかとということであった。

お守りだけでは力が弱いという懸念に対しては、作成したお守りを園児たちとともに神社に奉納し、お守りの力を恒久化してもらうというアイデアを新美が出したが、担任教師も園長先生もそれを良しとはしなかった。それでは河童とは怖い存在であるというイメージが固定されたままこころに残り続けるからである。園長先生は「なるべくスッと終わり、後々までに引きずらないことが望ましい」と指摘したが、奉納するだけでは河童への恐怖心は潜在するに過ぎず、いつまた回路するか分からないというわけである。この指摘は、新美の心理臨床家としてのこれまでの経験から、非常によく納得できるものであった。集合的イメージにコミットするときには、コミットし始めるときよりもむしろそこからどう抜け出るかのほうが重要である。そう考えると、なるべく意識の関与が増すように、しかも肯定的なイメージが残るように終結することが大切であろう。

このような考えのもと、園長先生と担任教師、新美で長い時間議論して改良した結果が表2の流れである。この流れへと練り上げるなかで、活動回数を1回増やして5回にすることが園長先生と担任教師により許可された。

表2. 活動の流れについての最終案

回	概要
# 1	彦根における妖怪の紹介と河童イメージの導入
# 2	少しかわいい河童の絵本を読み聞かせる
# 3	少し怖い河童の絵本を読み聞かせる
# 4	「河童がちょっかいをかけてくるのは寂しがり屋なのに恥ずかしがり屋だからだ」と説明し、河童とお友達になるための絵手紙を描く
# 5	河童から一人一人にお返事が来る

詳細な活動内容とその結果、すなわちその場での園児の反応などは次章に示すこととする。なお、活動は基本的に5回とも学生がリードし、担任教師と新美は園児たちの背後にいることとした。

2. 想像遊び活動の実際

2.1. 第1回目（2013年11月4日）

2.1.1. 使用教材

彦根市妖怪マップ、印刷された妖怪の絵（河童、大入道、天狗）を使用した。妖怪マップはA3白紙を16枚張り合わせて彦根市の略図を描き、彦根に伝わっている妖怪たちの絵を目撃場所ごとに描きこんだものをゼミで作成した。妖怪の種類と目撃場所については「彦根妖怪図鑑」（NPO法人芹川子育て支援部門、2013）を参考にした。

2.1.2. 目標

幼稚園すぐそばに流れる宇曾川に河童がいるかもしれないと感じさせることとした。

2.1.3. 活動の詳細

来訪学生は男女各1名の計2名であった。

最初に自己紹介として名前を言い、聖泉大学の学生だということ、自分たちがある妖怪を探していること、みんなに力を貸してほしいと思っていることを告げた。

その後、まずは園児たちが妖怪というものを知っているか尋ねたところ、知っているという声のみが上がった。河童を挙げる園児もなかにはいた。その後、自分の目で妖怪を見たことがある園児がいるかどうかを尋ねたところ、少数の園児が見たことがあると答えた。その後、有名な妖怪3種（天狗、大入道、河童）について、絵を見せながら紹介した。河童についてのみ少し詳しく解説したあと、彦根でもこの3種の妖怪を含めほかにもいろいろな妖怪が昔から目撃されていると語り、自作の妖怪マップを園児たちに提示しながら聖泉大学と稲枝東幼稚園のすぐ近くを流れる宇曾川にも河童がいると伝わっていると語った。また、幼いころに宇曾川で河童を見たという老人に出会った²とも告げ我々も聖泉大学の敷地で河童の足跡らしきものを発見したと伝えた。

²河童の足跡らしきものを大学内で見たというのは創作であったが、河童を目撃したというお年寄りに学生が出会った話は実話である。土井（本論文執筆者の一人）が介護施設に実習に出かけて利用者の方々と雑談している中で「今度、宇曾川に河童がいるというお話を幼稚園にしに行く」と語ったところ、あるお年寄りが自分は幼児期に宇曾川で河童を見たと言ってくれた。その場にいた別のお年寄りは河童なんていないと主張したが、語ってくださった方はごく真剣な表情で、自分は本当に見たのだと強く主張したという。

そのうえで、自分たちが探している妖怪とはじつは河童であると明かし、我々は河童情報を集めに稲枝東幼稚園にやってきたのだと告げた。

河童を見たことがあるかどうかを再度尋ねると、先ほどより挙手した園児は増えた。が、挙手しなかった園児も多かった。そこで園児たちに、自分たちが河童を発見したいこと、そのために来週までに河童を探したり、保護者たちの中で河童を見たことがある人がいないかどうか聞いてほしいということをお願いして退室した。なお退室の前に、次週やってくるのは河童研究会のべつのメンバーであることも告げておいた。

2.1.4. 学生の感想・反省

学生の間で予想していた以上に興味関心を抱き、発言してくれる園児が多かったことに驚きを覚えた。妖怪マップに描いた彦根の天狗が白山神社にいると伝わっていることまで知っていた園児がいた。発言しない園児も、真剣に私たちの妖怪の話を聞いてくれたことが嬉しく思った。幼稚園の先生も興味深い様子で妖怪の話を聞いてくれたように感じた。ただし、一人の園児が、妖怪に対して恐怖心を抱いている様子だったので、次回以降の活動では、恐怖心を膨らませすぎないように注意する必要があると感じた。

第一回目の活動全体としては、次回以降の活動に対して希望を持つことができた活動であったと自己評価したい。園児に想像遊びを楽しんでもらいつつ、学生も楽しむことができれば今回の活動は成功であると言える。松浦（本稿執筆者の一人）は考えた。

2.2. 第2回目（2013年11月11日）

2.2.1. 使用教材

絵本「かっぱのかっぺいとおおきなきゅうり」（田中、2006）、妖怪マップ、妖怪が好きなものを尋ねるクイズで使用する絵を使用した。

2.2.2. 目標

前回の話のおさらいをし、河童の容姿などを思い出してもらおう。河童の好物はきゅうりということを理解させる。

2.2.3. 活動の詳細

今回の来訪学生は男女各1名の計2名であった。

最初に園児達に自己紹介をし、先週に話した内容を覚えているか、どのような妖怪について話していたのかを尋ねた。その後、稲枝東幼稚園の近くで河童の目撃情報があったという話を再びして、園児たちに目撃をしていないかと尋ねた。目撃したと答えた園児には、用意しておいた妖怪マップと照らし合わせながら河童の目撃場所を答えて貰った。その後、河童はどのような容姿をしているかを園児達に尋ね、河童の絵を見せながら答え合わせと解説を行った。次に、きゅうり、魚、りんごの絵が描かれた紙を園児達に提示し、河童の好物はどれであるかというクイズを行った。園児に挙手の後、回答をしてもらい答え合わせを行ったが、全員がきゅうりと正解していた。

その後、用意していた絵本「かっぱのかっぺいとおおきなきゅうり」を園児達に読み聞かせた。

その後、園児達に絵本の内容について感想を求めた。

絵本を読んだ後、改めて河童の好物はなんだったのかを園児達に尋ねたところ、やはりきゅうりとの返答が得られた。その後、宇曾川にきゅうりが流れていたのを目撃したという情報を園児達に伝えた。河童の落としたきゅうりなのかなとそれとなく園児達に語り、宇曾川には河童が本当にいるのではないかと期待させた。その後、来週も「河童研究会」のメンバーが稲枝東幼稚園に来るということを園児に伝え、退室した。

2.2.4. 学生の感想・反省

まず幼稚園に行き園児たちに対面して感じた事は、想像していたよりも園児たちが物怖じしないということであった。幼稚園に行くまでは河童という妖怪を題材とした活動であるし、知らない人達が来るので園児たちも怖がって活動に参加してくれないのではないかと心配していた。しかし実際はその逆で園児たちの方から積極的に活動へ参加してくれた。これは前回の来訪学生が園児たちの緊張等をほぐしておいてくれたからだろうと思われた。

園児に河童の目撃情報を聞いた時は、たくさんの園児たちが河童を目撃したと答えてくれた。河童を見たような気がする、のように曖昧な返答をした園児は一人もおらず、見たと答えた園児は河童の容姿、見た場所等詳細に話してくれた。河童の好物を当てるクイズでも、選択肢となる絵を提示する前から答えを叫んだ園児もいた。

園児たちを見渡して感じたのが前列もしくはその付近に居る園児たちは積極的に活動に参加し、色々な発言をしていたが後ろに居た園児は多少河童に恐怖を感じているように見えた。発言もせず周りを伺っていた様子が印象に残っている。

2.3. 第3回目 (2013年11月18日)

2.3.1. 使用教材

芹川の川崎氏に推薦された絵本「おっきょちゃんとかっぱ」(長谷川・降矢, 1997)を使用した。

2.3.2. 目標

人と河童のかかわりについてイメージを膨らませる。

2.3.3. 活動の詳細

今回の来訪した学生は、事情により学生1名のみであった。そこで園児の前にはこの学生と新美の2人で立つこととした。最初に挨拶と自己紹介をし、河童やその手がかりを探すようにと先週依頼したことから、この一週間のうちに河童を見たかどうかを園児たちに尋ねた。河童を見たという園児たちに対しては、河童をどこで見たのかなどの発問をした。さらに、先々週の振り返りとして、河童はどういう姿であるか、何が好きかなどの発問をした。なお、園児が発問に回答する際は、一人ずつ指名して発語させることとした。

その後「おっきょちゃんと河童」という絵本の読み聞かせを行った。絵本を読み終え、園児から感想を求めた。また、絵本で登場する河童(ガータロー)についての発問をいくつかした。その中で、河童は優しいと思うか怖いと思うか、どちらであるかを挙手させ、なぜそう思ったのか回答を求めた。

まとめの時間では、まず絵本のガータローのように優しい河童もいるかもしれないが、乱暴な河童もいるかもしれないということを伝えた。その後、河童にも苦手なものがあるということを経験すると園児は非常に興味を持ち、「教えて!!」という声が多数上がった。そこで次回は河童が苦手なものを教えますといい、それを使って河童除けのお守り作りをしましょうと告げた。そして、次回までに河童が嫌いなものはなにか、大人の人に聞いてくるように依頼して退室した。

2.3.4. 学生の感想・反省

3度目の訪問ということもあり、教室に入ると園児たちから「また来た!」「また妖怪の人がきた」という発言があった。このことから園児たちには少し飽きが出始めているのではないかと考えた。ただしこの回の最後に河童の苦手なものを尋ねた時の園児たちの反応は、開始時よりも積極的であったように感じられた。

この1週間のうちに河童を見たかどうかの発問に対しては、「見た!」と答える園児が多かった。どこで見たのかを問うと、「宇曾川で見た」という声が挙がった。

宇曾川の河童がどういう姿をしているかという発問に対して、ほぼ全員が大声で回答した。「頭に皿がある」「きゅうりが好き」「すもうに勝つ方法はお辞儀をする」などと発言していたことから、前回、前々回に河童について教えた内容を覚えているということが分かった。しかし一方で、「全身赤色」という発言が全くなかったため、河童は緑という一般的な印象と覆すほどのインパクトはなかったと考えられた。

絵本の感想では、ガータローが優しいと思った園児は半分以上であったが、怖いと思った幼児もおおよそ1/3ほどいた。優しいと思った理由は、「おっきょちゃんをお家に帰してくれたから」「お祭りに誘ってくれたから」という意見があった。一方、怖かった理由は、絵本の内容とは違うが、「河童が人の足をつかんで川に引きずり込むから」という意見があった。絵本やこれまでの河童解説とは異なる内容の回答があったことから、自宅において保護者などから河童の話聞かせてもらっていたのではないかと考えられる。

2.4. 第4回目

2.4.1. 使用教材

A4サイズの白紙30枚、色サインペン（園児所有）、河童の絵（印刷）、河童の絵（学生による手書き）5枚を使用した。

2.4.2. 目標

河童をじっさいに近くにいるかもしれない身近なものと感じられるようにする。また河童が怖い園児にはその怖さを減少させる。

2.4.3. 活動詳細

今回はクラスの園児全員に描画活動をしてもらう関係上作業量が多くなると予想された。そこで、来訪学生は3人（男子1人女子2人）とした。

いつも通りに挨拶をし、先週読んだ絵本の概要を改めて語ったのちに、先週同様、河童のこと

を優しいと思うか怖いと思うかを尋ねた。その後、この1週間のうちに河童は何が嫌いか大人に聞いてくれた人がいるかどうかを園児たちに尋ねた。挙手した中から3人に各自の調査結果を語ってもらい、感謝した。続けて「それでは、みんなで河童よけのお守りを作りましょう…とやりたいところやけれど、じつはこの1週間僕ら河童研究会はいろいろと話し合いをしました。みんなちょっと聞いてください」と告げた。それから園児たちに語ったのは、河童がなぜ子どもたちにいたずらをするのかについての、我々の考えであった。河童は人間の子どもに相撲をしようと声をかけて一緒に遊ぼうとする、ということは河童は人間の子どもが好きはずだ。それなのになぜ、川の中で足を引っ張るような乱暴もするのだろうか。河童研究会はその理由を一生懸命考えた結果、河童は恥ずかしがり屋だからではないかと結論した。つまり河童もほんとは人間の子どもと一緒に遊びたいのだけれど、恥ずかしくて自分から仲良くなつてほしいとは素直に言えなくて、でもやっぱり遊びたいから、子どもを川で見かけたらついちょっかいをかけてしまうのではないかと考えたのである。この説明がどれだけ園児に理解できたかは分からない。うなずいて聞いてくれた園児もいたし、そうでない園児もいた。

しかし、さらに続けて、「だから今日は河童よけのお守りではなく、河童が喜んでくれそうな絵を描いて贈ろう」と提案したが、この提案には多くの園児がうれしそうな表情になり乗ってきたように感じられた。もしみんながそういう絵を描いてくれたなら、僕は聖泉大学の敷地すぐ隣を流れる宇曾川の、河童の足跡らしいものがたくさん見つっている場所に絵を置いて来ると伝えて、だから河童さんの絵と河童さんが喜びそうなものを書いてあげてほしいと伝えた。また、河童が嫌いなものは描かないであげてほしいともお願いした。見本として、印刷された河童の絵1枚と、学生たちが描いた河童の絵を呈示した。ただし、これを真似して描いてもいいし、全く別様に描いても構わないと念押しをした。前者はカラーのなかなか立派な絵であったが、後者はサインペンでざっくりと描いた、あまり上手とは言えないものであった。このような見本を示したのはお絵描きが苦手な園児にとっては上手すぎない見本があったほうが参加へのハードルが下がってよいだろうというクラス担任教師の意見があったためである。呈示後、当日出席した年長クラスの園児全員に1枚ずつ紙を配り、先ほど指示した絵を描いてもらった。学生たちは園児の様子を巡視し、描いているものについて尋ねた。描き終わった園児には名前を書いてもらうように指示した。

全員が絵を描き終えたのを待って絵はすべて回収し、河童の足跡らしいものがたくさん見つっている場所に絵を置いて来ることを約束して退室した。

毎回の活動時間は30分までと約束で始まった活動であったが、クラス担任教師は今回の取り組みはそれを大幅に超えるとあらかじめ見込み、その心積もりをして下さっていた。実際、すべてが終了し退室したのは、開始からちょうど60分後であった。

2.4.4. 学生の感想・反省

園児たちは前回の絵本の内容を結構覚えていて、積極的に発言してくれた。すこし河童を怖がるような子もいた。また全体的に自分たちの発問に対して受け答えをはっきりしてくれ、話を一

生懸命聞いてくれていることが伝わってきた。

絵手紙については、なかなか河童を描くことのできない園児もいたし、他児の絵を見ながら描いている園児もいた。学生の描いた手本はそれほど上手くないがゆえに園児の笑いを呼んだ。手本を貼った黒板を見ながら描いた園児もおり、手本の呈示は効果的であったように思われた。自分の名前が書けない園児も数名いたが、その場合幼稚園の先生方に書いていただいた。

時間がかかってしまったのは反省点であった。また、早々に絵を描き終えた園児への対応や指示を考えていなかったのも反省点として残った。

2.5. 第5回目

2.5.1. 使用教材

河童からの手紙を用意した。手紙は和紙を茶色く色づけた水で濡らして少し皺をつけ、乾かしてから墨汁と毛筆で書いた。文面は園児の絵を見ながらゼミ生全員で考えた。なるべく短い文章(例「きゅうりたくさんありがとう」「どひょうでおすもうとりたいな」)を心掛けた。また、園児の名前も添えることとした。絵手紙を描く回に欠席した園児用に、園児の名前を添えない手紙(大きな字で「ともだち」)も数枚用意した。

2.5.2. 目標

河童と仲良くなれたことを感じ、河童の気配を肯定的なものとして感じられるようになる。

2.5.3. 活動詳細

最終回は学生3名(男子2名、女子1名)で来訪した。

いつも通り園児たちに挨拶と自己紹介をした後、前回の作業の目的の確認として、なぜ絵を描いたのかを覚えているかを尋ねた。園児たちは我先にと挙手して回答してくれた。

次に、園児たちに手紙が届いたと告げた。園児たちはみな、たいへん喜んでくれたように見受けられた。その後、手紙を1枚ずつ披露しながら園児たちに挙手をしてもらい、当てた園児に手紙の文章を読んでもらった。その後その手紙が宛てられた園児に手渡し、手紙が届いてどう思ったかを答えてもらった。園児には、手紙を大事に持っていてね、と伝えた。前回欠席の園児に対しては、名前を添えない手紙を渡し、〇〇ちゃんにもちゃんとお手紙が来たよと伝えた。全ての園児に手紙を渡したあと、学生が手縫いした小さな布袋を配布し、そのなかに先ほどの手紙を折って入れるよう指示した。

最後に、まとめとして、これで河童と友達になれたかもしれない、もしいつかどこかで河童と会ったら遊んであげてねと伝えた。また河童研究会がここにやって来るのは今日で最後だと伝え、もし今後河童を見かけたりなにか情報が得られたりしたら、幼稚園の先生を通じて聖泉大学に知らせてほしいと依頼し、退室した。今回も活動時間は30分でまとまらず60分近くかかってしまった。が、クラス担任教師は今回もやはりそのくらいかかるだろうという心積もりでいて下さり、快く許して下さいました。

2.5.4. 学生の感想・反省

園児たちがこちらからの質問に答えてくれた時に、かなり活発に挙手してくれたため、全ての園児を当てきれなかったのが反省点として残った。またその陰で、手を上げない園児には発言してもらおう機会が作れなかった。

紙を折って袋に入れる際にかかりの時間がかかる園児がいたことは想定外であったが、そのため他児がしばらく手持無沙汰になってしまった。このことへの対応は想定しておくべきであった。また今回も所定の時間を超えてしまったことは大きな反省点であった。

3. 保護者およびクラス担任教師の反応

3.1 活動全体に対するクラス担任教師の観察と所感

5回の活動終了後、活動全体を通しての所感をクラス担任教師からいただいたので下表3に示す。

表3. クラス担任教師の観察と所感

内 容
<p>第1回の活動で河童の話聞いた子供たちは、少し怖いという思いを持ちつつも、関心はかなり高かった。「お家の人に見たことがあるかどうか聞いておいてね」という学生の言葉を受けて、降園時にさっそく保護者に話をしている子供が多かった。</p> <p>子供たちは、絵本やTVアニメの世界で知っている河童と、今回学生が探している河童が少し違うと感じ、「見たことないけれど、もしかしたらいるかもしれない」「いったいどんな姿をしているのだろう」と思いを馳せる姿が見られた。想像力の高まりは想像の世界を広げることになったのではないだろうか。第5回目の活動にて河童から届いた手紙に目を輝かせて喜ぶ姿は、印象的であった。</p> <p>これからも、イメージしたり想像したりする力を養うことで、思いやりの気持ちをもって周りの人と関わる子どもを育てていきたい。</p>

基本的に好意的な評価を下していただいていることがうかがわれる文面であった。また、絵本などに登場する河童と学生たちが取り扱おうとしている河童が質的に異なっているという点を園児の反応を通じて指摘して下さっているが、こうした差異に鋭敏に気づいておられる先生に支えられたからこそ、今回の活動は円滑に進んだのだらうと思われた。

3.2. 保護者の反応

2013年12月18日、稲枝東幼稚園にて園主催の保護者懇談会が開催された。その開始前の30分をいただき、今回の活動をおこなった年長組の保護者を対象にミニ講演会が実施された。講師は新美であり、テーマは「臨床心理士から見た子ども時代の必修科目」であった。参加者は13人（年長組の園児は25人）であった。

ミニ講演会で新美は、現代社会では「目に見えないもの」への感性や畏敬の念が失われつつあるが、それこそが人間をほかの動物との区別する（養老・斎藤，1992）と述べた。そしてその念を取り戻すための取り組みとして河童を用いた活動をさせていただいたことを話し、5回にわたる活動を具体的に報告した。最後にアンケートを取らせていただいた。質問項目は2項目で、

活動期間中の子どもの様子を尋ねる項目と、活動全体を通しての保護者の意見・感想などを尋ねる項目であった。結果は下の表4にすべて記載した。

表4. 保護者アンケートの結果

	記述内容
活動期間中の子どもたちの様子について	<ul style="list-style-type: none"> ・ お母さんは河童を見たことがある？ってまずキラキラした目で聞かれました。私は河童だけは存在すると前から言っていたので「前から言うてるやん」「いるで」と言うと、幼稚園で聞いてきたことをうれしそうにいっぱい話してくれました。河童さんからの手紙もカバンにつけて大事にしています。 ・ 帰り道、友だちと見せ合いながら帰ってきました。「〇〇くんはキューリをたくさん描かかったから“キューリありがとう”って書いてあったんやで」など、友だちの内容までよく覚えていました。家に帰ってから姉、父、一人一人にうれしそうに見せていました。半紙が古ぼけている感じ、少し匂いがする感じ、全てカッパの為せる技、でもホント？という気持ちも持っているようでした。 ・ とてもよろこんでいました。おじいちゃんおばあちゃんにも手紙をみせてカッパはどのようなかを説明していました。妖怪に興味を持ち、妖怪の本を買ってずっと読んでいます。いろいろと想像して、こわがったり楽しんだりしている姿があります。 ・ 先生から河童のお話を聞くまで、子供が幼稚園で河童について話をしていることも知りませんでした。私から子供に聞いても「話したくない」とのこと。怖かったのかなとも思います。 ・ 私自身の子は、第1回目の時もそれほど河童に関して話をしてくれず、まわりの子が「河童みたことある？」と帰りに聞いてきて、みんなすごく興味を持っているようでした。普段から特別、幼稚園の話をする子ではないのであまり聞けませんでした。河童からの手紙をもらった時はすごく誇らしげに家族みんなに見せてました。小学生の姉に「河童なんていない」と言われて、「でも河童さんからの手紙をもらったんだ」と一生懸命話していました。 ・ 家に帰ってきてすぐに「お母さん、河童って知ってる？ 見たことある？」と元気に聞いてきました。本人たちにとってすごく刺激的な話で、とても楽しかったんだろうなあと子供の話聞いて思いました。 ・ 「河童って知ってるか？ 宇曾川にいるんやで！」とある日言うてきました。すっかりいると思込んでいます。お母さんは見たことあるん？などなど、かなり河童のとりこに…。
子どもたちの様子について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 帰ってきて子供が「今日は河童の話いっぱい聞いてな。河童ってこわいねん」と色々そこから話してくれました。怖いけれど見てみたいとも言っていました。 ・ 1回目から子供は河童を少し信じはじめ、帰り道（文録川）、河童を探す姿がありました。この時、私自身はこの活動を知らず、以前から読んでいる「かいけつゾロリ」シリーズの妖怪の本の影響かと思ってました。2回目の本はかなり怖かったようで、家に帰ってきても「河童きらい」と言っていました。3回目以降はまた楽しかったようです。最後に河童からの手紙に関しては、とても嬉しそうに「良いもん見せたるか？」と言って見せ、「大好きなお母さんにあげる。大切なもんやし」とくれました。紙がコーヒーのにおいがしたようで、「河童もコーヒー飲むんやね」と言っていました。 ・ お手紙をもらった日に、また手紙を書くと言って絵を描いていました。そして家から川まで近いので、橋の上から手紙を流しました。また返事が来るかな、と嬉しそうでした。 ・ ある日突然河童の話をし始めたので、どうしたのだろうと思っていたのですが、こういう活動をされていると知り、納得しました。毎週のように「ママ、河童とお相撲を取る前に何すると思う？」とか「河童の嫌いなもの知ってる？」など嬉しそうに家で話してくれました。最後に手紙をもらって帰ってきたとき「河童さんから手紙が来たんやで！！」と目を輝かせていました。元々生き物や恐竜が大好きなのですが、さらに空想の生き物にも興味を広げたようです。 ・ 子供はすごく信じていて、その気持ちを持ち続けてほしいと思い、私も永源寺の川で河童を見たことあるでって言うてます。いろいろと想像をふくらませています。 ・ 河童知ってる？見たことある？から始まり、毎回楽しみに想像をふくらませていたように思います。近くの川に探しに行こうと見に行ったり楽しかったようでした。

	記述内容
活動全体に対する意見	<ul style="list-style-type: none"> ・ 昔から妖怪さんたちは、近づいては危ない場所などに存在するように話がありました。何かを怖がって、少しでも自分自身を守るように、大きくなった時、そのお話が大人の優しいうそで、自分の子供たちにも優しいうそをついてもらいたいです。 ・ 目に見えないものを感じる畏敬の念など持つこと、本当に大切だと思います。はじめ「聖泉大学で河童の研究をされている」と聞いて、正直少し笑ってしまう部分もありましたが（スマセン！）、心理的な分野とつながっていることも分かり、とても勉強になりました。子ども達への働きかけ、ありがとうございました。 ・ 想像遊びはたまに家でもしていました。先生のおっしゃるように目に見えないものに対して、いろいろと思いをめぐらせて、子どもなりに何か考えるきっかけになったと思います。ものすごく頭を使っているなあと、そばで見ていると思います。 ・ 最後に河童からの手紙をもらってきて、とても喜んでみんなに見せていました。おばけ、妖怪、鬼はとてもこわくて信じています。今回もきっと河童からの手紙をもらってびっくりしていると思います。 ・ 短期間のことで、人を思いやる気持ちを育むきっかけの一つになっていけば、すごくいい体験をさせて頂いたと思います。特にこのごろお友達とのけんかや言い合いをすることが多いようなので、河童をきっかけにいろいろな話ができればと思います。 ・ 自分も子供の頃に河童やいろんなことを信じていたので、夫婦そろって「見たことあるよ。お母さんは池で河童さんが手を出したの見たよ」とか話していると、今度は「一緒に探しに行こう!」となりました。 ・ いい経験をさせてもらったと思います。こあら組さんでは妖怪ブームが来て、ほかの妖怪にも興味をもって楽しそうです。ありがとうございました。 ・ 子供は想像が豊かでこんなことを思っているんだななど、新しいこともたくさん発見できてよかったです。 ・ とても楽しい活動をありがとうございました。 ・ 河童さんにももらった手紙を大切にしまっていて、本当にうれしそうにしていたのを見て、とてもいい経験をしたのだと思いました。ありがとうございました。 ・ 最近の子は情報があふれていて現実的ですが、こういった想像遊びはほんとうに大事だと思います。普段はよく絵本などを読んで想像遊びをしています。とても貴重な体験をさせていただいたと思っています。 ・ 川のそばで、きゅうりを食べる。 ・ (記載なし)

4. 振り返り

今回の活動とその結果についてはここまで示してきた通りである。しかし、紙幅の関係で、活動に対する十分な考察を展開することは難しい。本稿では活動の結果得られた知見を幾つか挙げるのみとしたい。

4.1. 本活動の園児への影響について

まずは本活動の園児への効果に関して述べる。本活動では河童という妖怪との交流を通じて、目に見える世界が多重的な意味を持っていることを園児に感じさせることはできたかと思われる。たとえば保護者からのコメントの中で、河童を探しに行こうと散歩に出かけたという報告がある。おそらくこれまでもこの家族は散歩に出かけたことがあるに違いないし、その際にももちろん川を目にしたこともあっただろう。しかし今回の取り組みの後の散歩は、川は単なる水の流れではなく、「何か」が潜んでいるかもしれない場所であるとも感受されていたことになる。そしてその「何か」はこの地域の伝承ともつながっているものであった。

この変質がどれだけ永続的なものかは分からないし、ひょっとしたら数週間で元のイメージが上書きされてしまうかもしれない。が、少なくとも活動のすぐ後の時点では、園児は中村（1992）の提唱する「臨床の知」の3原理（シンボル、コスモロジー、パフォーマンス）を生きていたように思われる。直後の時点においては、宇曾川は現実界のものでありつつ異界とも通じた場所であると園児たちに感じられており、この意味で宇曾川は多義的な意味合いを含んだ〈シンボル〉となっていた。またその多義性の一部は、河童という伝承されたものとつながっており、それはかつてのこの地域の〈コスモロジー〉に根差している³。さらにこの現実界と異界との両義性に誘発されて幾人かの園児は家族を連れて散歩＝探検という行為をしたわけであるが、これは受動的能動という性質を持った〈パフォーマンス〉であったとみなせるだろう。すなわち園児のうち少なくとも一部はこの活動の影響を受け、どこもかしこも等質な空間を生きざるを得ない生から少し離れることができたのではないかと考えられるわけである。

4.2. 本活動の家族への影響について

次に挙げたいのは、この活動が園児のみならずその家族をも巻き込んでいたということである。今回の活動の対象は園児であった。しかし、園児がこれまでとは少し違ったコスモロジーを生きているのを、保護者たちは単に受け入れるばかりか、その価値を積極的に肯定していることはアンケート結果からも明らかであろう。大人の生きるコスモロジーが変わることはなかなかない。しかし、子供を通じてかつてこの地域に息づいていたコスモロジーに触れることは、保護者自身にとっても深い経験、少し大げさに言えばたましいの癒される経験であったかもしれない。

4.3. 本活動のゼミ教員への影響について

最後に、これは本稿執筆者のうちの新美の所感である。本活動の前提となる「たましい」について2013年度当初にゼミ生たちで話をしたことはすでに述べたとおりである。だがじつは学生たちに理解されたという手ごたえは、あまりなかった。それは説明が悪かったからだということが活動後の今ならばはっきりと分かる。あとき新美が説明したのは、たましいという目に見えないものへの感受性と畏敬の念だけであった。それゆえそこで語られたたましいは、いわば霊的な存在者であるにすぎなかった。しかし、もし新美が学生たちのたましいへの感受性を啓きたいのなら、たましいがこの世界と、そしてもちろん学生たち自身の生と、どう有機的に関連しているかを語るができなければならない。その関連を新美は説明していなかったのである。

にもかかわらず活動のなかで、学生たちは徐々に、目に見えない存在者たる河童にある種のリアリティを感じ、さらにそれへの畏敬の念も感じる生を生き始めているように新美には思えるようになっていった。その理由として思い浮かぶのは、活動を下支えしているのが架空のストーリーではなく、河童が宇曾川にいるという伝承だったという点である。この伝承のリアリティあれ

³ 幽霊と妖怪の違いはさまざまに語られているが、心理臨床学とくに Jung 派の分析心理学の観点からいえば、個々の幽霊は集合的無意識に直接関連するわけではない。これに対し妖怪とは、人間の事情に関係なくその土地に根付いたものであり、いわば集合的無意識がその元来の生息地である。集合的無意識の賦活とそれに伴うコスモロジーの再生成という観点からは、幽霊を排して妖怪のみで企画した NPO 芹川の川崎氏の見解は、改めて卓見であると思われる。

ばこそ学生たちも、園児たちが生き始めたコスモロジーを受容できたのであろう。仮に今回の取り組みで取り上げたのがまったく架空の怪物だったならどうなったであろう。おそらく学生たちも自らの園児への語りに深くコミットすることができなかったのではないだろうか。そしてそうなってしまったなら、この活動はきっと何も生み出さなかったのではないだろうか。

加えて、活動の中で新美の中に伝承の担い手としての意識も徐々に芽生えていったことも報告したい。筆者自身はこの地域の出身ではない。だが、この地域の大学で教育し、地域の子供や若者と関わるからには、このような役割を担うべきだという要請が内的な声として聞こえてきたのである。これはおそらく筆者の生きるコスモロジーが少し変質したことを意味しているのだろう。この変質は、大なり小なりゼミ生たちにもあったように感じられたし、おそらくは、稲枝東幼稚園の先生たちにもあったのではないかと思われる。たましいへのコミットメントからコスモロジーへのコミットメントへ。この変容が、最も大きな収穫であったように新美には感じられている。

引用文献

- 安曇幸子・吉田裕子・伊野緑（2003）：でた！かっぱおやじ。サンパティックカフェ
安曇幸子・伊野緑（2003）：でた！かっぱおやじの舞台裏。サンパティックカフェ
NPO 法人芹川子育て支援部門（2013）：彦根妖怪図鑑。NPO 法人芹川
田中友佳子（2006）：かっぱのかっぺいとおおきなきゅうり。徳間書店
中村雄二郎（1992）：臨床の知とは何か。岩波書店
長谷川摂子・降矢奈々（1997）：おっきょちゃんとかっぱ。福音館書店
養老猛・斎藤磐根（1992）：脳と墓Ⅰ。弘文堂

謝 辞

今回の活動は稲枝東幼稚園の多大なご協力により成立した。学生の教育のためと快く許可していただき、また活動に関してつねに適切な助言や指摘をしてくださった今西陽向園長先生と年長組クラス担任教師の高須徳子先生には深く感謝したい。また活動開始にあたっていくつもの貴重な助言をしてくださったNPO 芹川の川崎敦子氏にも、改めて感謝を申し上げたい。